

若年性認知症の方の支援について

～3月12日(日) 新座市介護職員認知症研修

「若年性認知症を知ろう」に参加して～



イラスト／細井美風

若年認知症当事者の話を伺うのは初めての経験でした。Iさんは61歳の男性。南極で気象観測の仕事経験もあり、現在は職場の理解を得て気象のデータ処理の仕事が続けられています。

2年前の春、支持が伝わらない等の仕事上のミスが続き、秋に専門病院でアルツハイマー症と診断を受けました。「まさかの思い、愕然とした思い」と当時の心境を切々と語られました。再雇用となり、夜勤はなくなり日中勤務と変更になったものの、仕事の速度が遅くなり、周りのスピードについていけず、ルーティンをこなせない等の辛い現実にも向きあわれています。只、俳句や料理等沢山の趣味もお持ちで、お住いのマンションでのシルバークラブや認知症カフェでの活動に自ら参加され、日常生活を大切に、そして楽しまれているようです。自ら公表する、カミングアウトされたことで可能になった今の日々とのことでした。

同席の奥様からは「困っていることをそのままにせずに楽しい雰囲気心がけ、イエス、ノーで答えられるよう会話を工夫する」とのご意見がありました。Iさんに対しての深い思いやりと今後に向けての強い意志を感じました。

参加された埼玉県若年性認知症コーディネーターからは高齢者認知症との違い、社会的な課題、就労、社会参加居場所作り等多くの検討すべき点が説明されました。

私自身は総ての年代の認知症に対して「忘れてもいいんだよ」という大きな社会の受け皿があったらいいなと思います。予防や治療薬だけに目を向けるのではなく、違う視点が必要な時期かと思います。

Iさんから専門家に対して「更にプロフェッショナルに」という要望も出されました。さて最後にIさんから大好きと言われた歌を紹介します。河島英五の「時代おくれ」です。『目立たぬように、似合わぬことは無理をせず、人の心を見つめ続ける～♪』いいですね。Iさんのお人柄がそのまま伝わってきました。ありがとうございました。

(民生委員／まどかボランティア／胡桃沢良子)